

「サピア=ウォーフの仮説について」 補説

江村, 裕文 / EMURA, Hirofumi

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2008-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003075>

「サピア=ウォーフの仮説について」 補説

江村 裕文

筆者は、江村 (2007) 「サピア=ウォーフの仮説について ——文化その3——」において、角田理論に対して、「西江氏を除くと、言語学の分野からは積極的な意見が聞かれず、この20年間、事態を静観し続けている。というよりも、日本のいわゆる言語学者たちには、角田理論を「サピア=ウォーフの仮説」と結びつけて考えるという発想がなかったというのが真相ではあるまいか。」と、日本の言語学者に対していささか辛口のコメントを書いた^①。

脱稿してすぐに、『大修館英語学事典』を手にする機会があり、その中に角田理論に対する言及を見つけたので紹介したい。

最初の言及は、「第五章 意味論」中の「Ⅸ 言語・文化・思想」の項目、「2. 言語と思想」の中で、以下のように述べられている^②。

2.1.5 角田

最近の興味深い研究に角田 (1978) がある。それによると、西欧人は人間の言語は左脳で聴くが、虫の音や邦楽器 (三味線・琴・尺八など) は西洋楽器と同じく物音としてすべて右脳で聴くのに、日本人は虫の音も邦楽器も左脳で (つまり言語脳で) 聴くという。さらに角田は、日本語の母音は左半球 (言語脳) 優位で処理されるが、西洋諸語の母音は右半球 (音楽脳) 優位で処理されることを実証し

ており、日本語の母音構造の特異性が窺われる。ポリネシア諸語（トンガ語・サモア語・マオリ語など）の母音が日本語と同じに言語脳優位の結果が得られたことも興味深い。

つまり日本人はいわば“自然の声”を聴くことができるので、情緒的（ないしは感情的）な傾向がより強まってきたとも考えられる。

二番目の言及は、同じ章の中の「2.3 Chomsky」「2.3.2 Chomskyの問題点」の「(iii) 生理的な違いに関するもの」にある^③。

（iii）生理的な違いに関するもの

日本人の耳は、コオロギやスズムシなどの虫の声や風の音・邦楽器なども言葉と同じく言語脳で処理されるのに対し、西洋人の耳では物音として聴かれるという例は、言語の違いが生理的な認知の違いにまでなっているものとして注目される。当然、花鳥風月を詠う日本文学の世界が西洋人には西洋人風に受け取られ、逆に日本人も西洋文学を日本的な感性で解釈している部分が多いことが予想される。音楽についても同じことが言えるだろう（吉田(1974)参照）。

『大修館英語学事典』のこれらの項目の具体的な執筆担当者については不詳であるが、序文に第五章の分担編集者として名前があがっているのは池上嘉彦氏である^④。とすると、ここで紹介した角田理論に関するコメントは、池上氏の見解として理解してもいいのかもしれない。

「サピア=ウォーフの仮説」について造詣の深い池上氏のコメントであるから、このコメントは、角田理論と「サピア=ウォーフの仮説」に関する標準的な理解と考えてもよいであろう。

ところで、生成文法では以下の四つを言語研究の課題としている^⑤。

1. 言語の知識とはいかなるものか。
2. 言語の知識はいかにして獲得されるか。
3. 言語の知識を使用することを可能にしている仕組みは何か。
4. 言語の知識は脳内に、どのように具現されているか。

1. は「生成文法理論」の、2. は「心理言語学(あるいは言語心理学)」の、3. は「語用論」の、4. は「脳生理学」の、それぞれ研究対象である。

『大修館英語学事典』では「生成文法」の方法論、特に4. に関して批判をしている^⑥。

UG ないし言語機能に関する Chomsky の主張は、脳生理学的な裏づけを全く持っていない。現在得られている脳生理学ないし神経言語学的知見の中には、Chomsky の主張をごく微弱かつ部分的に支持するかに見えるものもある。一方、反証とも考えられるべきものも含まれている。いずれにせよ脳生理学の現状からは Chomsky の仮説の当否を検証するすべはないのである。

酒井邦嘉氏は、生成文法の言語研究の4. に関して精力的に研究を推進しており、Sakai(2005)において、脳内における「音韻」「語彙」「統語」それぞれをつかさどっている中枢を同定したと報告している^⑦。

この酒井氏は、酒井(2002)において、角田理論に関して、以下のよう書いている^⑧。

このように、男女の脳の違いや、左脳と右脳の差は確かに存在するが、巷で流布しているような話は、たいてい誇張か迷信である。日本人が右脳で虫の音を聞くことなどが証明されたことはないし、まして「右脳人間」となると SF の世界である。

という具合に、角田理論と「サピア＝ウォーフの仮説」との関係に触れた言語学者のコメントは存在していたということを確認しておきたい。ただし、ここであげることができたのは、角田氏の実験の結果を、何の疑問もなくそのまま受け入れた議論であった。

それに対して、脳生理学の研究者からは、角田理論は、なんら評価できるものではないという指摘がなされている。ここで紹介したように、『大修館英語学事典』に見られたチョムスキー理論に対する、脳生理学からの裏づけが全くないという批判は的外れであり、その研究を通して、「サピア＝ウォーフの仮説」に対しても新たな知見が得られる可能性があること、また、脳内の言語中枢の発見・確認・同定は、チョムスキーの「シンタクス・モジュール」の自律性・独立性の問題の解決にもつながる可能性があることを最後に指摘しておきたい。

注

- ① 江村 (2007) p.41
- ② 『大修館英語学事典』 (1983) p.782
- ③ Ibid. p.784
- ④ Ibid. p. v
- ⑤ チョムスキー (1988) p.3 ただし引用は西山 (2004) p.91 による。
- ⑥ 『大修館英語学事典』 (1983) p.670
- ⑦ Sakai (2005) p.817
- ⑧ 酒井 (2002) p.235

文 献

- 江村裕文 (2007) 「サピア=ウォーフの仮説について」『異文化 論文編』 8 pp.25-53
- 酒井邦嘉 (2002) 『言語の脳科学』 中公新書
- Sakai. K (2005) 「Language Acquisition and Brain Development」『Science』 Vol.310 pp.815-819
- 『大修館英語学事典』 (1983) 大修館書店
- 角田忠信 (1978) 『日本人の脳』 大修館書店
- チョムスキー (1988) 『Language and Problems of Knowledge : The Managua lectures』 MIT Press. 田窪行則・郡司隆男訳 (1989) 『言語と知識 マナグア講義録 (言語学編)』 産業図書
- 西山佑司 (2004) 「語用論と認知科学」 大津由紀雄・波多野誼余夫編著『認知科学への招待』 研究社出版 pp.91-105
- 吉田秀和 (1974) 「音楽展望—純粋な音と自然な音」『朝日新聞』 文化欄 9月19日